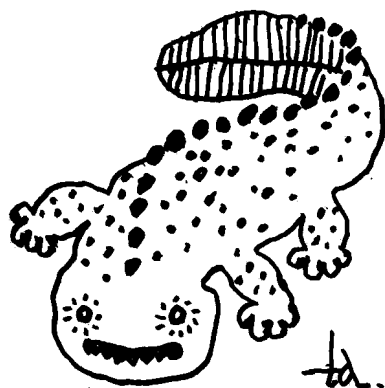


棟田博

ハンザキ大明神

棟田 博

ハンザキ大明神



ハンザキ大明神

定価 四〇〇円

昭和四十四年九月十五日 印刷

昭和四十四年九月二十五日 発行

著者 ■ 棟田 博

発行者 ■ 吉田達二

発行所 ■ スポーツニッポン新聞社

東京都千代田区竹平町

大阪市大淀区大淀町

北九州市門司区清瀬町

札幌市北二条

印刷／中日本印刷

製本／佐久間製本

発売元 ■ 毎日新聞社

郵便番号一〇〇

東京都千代田区竹平町

郵便番号五三〇

大阪市北区堂島上

郵便番号八〇二

北九州市小倉区紺屋町

郵便番号四五〇

名古屋市中村区堀内町

© 棟田 博 一九六九（換印省略）

ハンザキ大明神



目

次

月の夜は
痴漢出没
人間誕生
金が仇の
つららの涙
なだれ
ムシヨで
韋駄天
バカ刺客
時の流れ
一手千両

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

迷い辻

一〇九

逆転

一二七

帰ってみれば

一三五

祭ばやし

一三五

風雲

一四〇

めぐりぞ会わん

一四〇

星移り月変わる

一四四

心の旅路

一四三

目玉

一五三

赤帽

一六〇

残夢茫々

一六六

浮き沈み

一四

それから

一五

大判小判

二〇

一天地六

二九

ゼイタク苦勞

二四

さて、それから

三三

メランコリ

三六

赤い夕陽に

三四

何処へ

二四

あとがき

二五

ハンザキ大明神

装
本

官
田
武
彦

月の夜は

鮎大明神。

ハンザキだいみょうじん——と読む。ハンザキというのは、大山椒魚（オオサンショウウオ）のことだが、半分にひき裂いても生きているところから、この名がついたという。ともあれ、サンショウウオを御神体に祀っている神社は珍らしい。

さて。——

山国の美作に、三つの温泉地がある。

湯ノ郷と、奥津と、湯原、これを美作三湯と称ぶが、わけでも湯原は、山峡深い鄙びたいで湯である。

江戸時代の「諸国温泉番付」をみると、西方の関脇に「諸病苦——作州湯原砂湯」とある。砂湯は谿流にこんこんと湧き出るのを岩で囲んだ露天湯のことで、老若男女の混浴風景は、いかにもおおかで鄙びている。

その砂湯から五百メートルあまり下流の深いよどみが竜頭ヶ淵だ。

頃は、文禄のはじめというから、秀吉の朝鮮征伐のところである。淵に、異変が起った。

或る夜。月の出とともに、だしぬけに汐騒しおざわの音が聞えてきて人々をおどろかせた。こんな山中に波の音がとどろいてくるわけがない。家々から飛び出した人々が眼をみはつたのは、風もないのに竜頭ヶ淵が波だちさわいでいたからである。月光を波がしらがコナゴナに砕いて散りしぶき、ごうごうと淵が鳴っている。が、月が沈むと、嘘みたいのに、しいーんともとのよどみに返った。

異変は、月のある間じゅう続き、無月に入るとやんだ。が、また翌月の月の出から始った。いかなる兇変の前兆かと湯原じゅうの人々が気疎きそがつてしていると、

「では、おらが淵へもぐってみてやらい」

という者があらわれた。

川上郷の快童といえ、近在で誰知らぬ者はない。川上の郷士の倅で、三井の彦四郎といい、絵に描いた坂田の金時そっくりの若者であった。

八歳で猪を仕止め、十歳で荒れ狂うコットイ牛をねじ倒したという怪力である。

その夜は、十三夜の月が山峡の空にかかり、雁の渡りが鮮やかだった。

息を詰めて人々が見まもるなかを、彦四郎は全裸になり、

山刀を口に咥え、ざんぶと波の中へ飛びこんだ。

と、——波立ちは、ひときわ激しくなったが、それも束の間で、やがて、気味の悪い静けさに戻り、くつきりと洩に十三夜の月が映ったとき、快童彦四郎の姿が水面へぱっかり現われた。岸へ上つてきて、

「がいなハンザギがおった」

と、さすがの快童が唇をわなかせていると、ぷーんと、強烈な山椒の匂いが人々の鼻をついてきた。

ゆらりと、あたかも鯨のような大ハンザギが浮上したのはこのときである。

「鯢大明神縁起」には、長さ三丈六尺（十メートル余）胴まわり一丈八尺（五メートル余）と誌されている。

ひと呑みにされた彦四郎は、腹を斬り裂いて脱出したのだという。

ところで、その翌日の夜のことだ。

月の出とともに、川上郷の三井屋敷の戸をホトホトとたたきながら、咽び泣く者がある。

彦四郎が戸を開けたが、あたりに人の姿は無く、ぷーんと山椒の匂いが鼻にもつれただけで、月光のみ徒らに明るい。戸をしめて座敷に戻ると、またもや戸をたたいて泣く。

月のある間じゅうそれが続き、無月になるとやんだ。翌る月も同じことの繰り返しである。

快童の母は、すでに他界していた。現在、家族は父茂左衛門と妹もよとの三人暮しだ。

その年の秋なかばに、茂左衛門が非業の死をとげた。おのれが仕掛けておいた猪ワナに自らかかったのである。

次は、妹もよの番であった。父の喪の明けた正月そうそう、かねて婚約していた蛭仙部落の弥源次のもとへ嫁いでいったが、わずか一カ月足らずで不縁になって戻されてきた。

不縁の理由を彦四郎が訊くが、もよはただ泣くばかりで、一ト言もしやべろうとしない。婿があかないので、彦四郎は深い雪を踏んで蛭仙原へ行った。

弥源次の父の源次兵衛は、彦四郎を囲炉裡ばたへ招くと、先ず言った。

「どうも、もよに怪体なところがあつてのオ」

「怪体とは、どんな？」

彦四郎が訊ねると、

「弥源次も我慢のできるかぎりはしたそうなのオ。これがかのことでないけに、とうとう音をあげよつた次第でのオ」

遠まわしに、奥歯にもののはさまった言い方をする。そこで、彦四郎が、

「どがいなことを聞かされても、わし、おどろかんけに、はつきり言うてつかあさい」

源次兵衛はうなずくと、

「そもその、初夜の床入りのときからそうだったげな。いざ抱くとな、もよの身体からなんともかとも言いようのない匂いが流れ出る。ことが終るまでそれが続くげな」

「……」

「それでもしばらくの間は、弥源次も若いけに、匂いにかまわず精を出しておったそうなが、近ごろでは、あの匂いを嗅ぐと萎えてしまうとかでのオ。そんなふうでは、言うまでもなく夫婦の仲があんばいゆかんでのオ」

「その匂いは、いったい、どがいなう」

「山椒をほうろくで煎りつけるような……とも言うておったがのオ、なにやら得態のしれん匂いじゃそうな」

一言もなく、うなだれて雪香をく彦四郎へ、源次兵衛が野ウサギを一疋、もよへの土産にとことずけた。

彦四郎に番がまわってきたのは、その帰途からであった。

雪みちを踏みしめて歩いているうちに、手に提げる野ウサギが、次第に重くなってきたのである。とうとう片手で提げられず、両手に持って、やっとの思いで、わが家に辿りついた。

この日を皮切りに、稀代の怪力彦四郎の身体から、ぜんじ力が抜けはじめたのだった。

冬の永い湯原山峡も、山のなぞえにコブシの花が白々と咲

くと、つららが落ちはじめ、ミソサザイのさえずりを聞くころ、里の雪からとけはじめ、次第に谿流に水がさを増してくる。

雪の消えるのを待つて、彦四郎は野良へ出たが、鉾が重くて汗をしばった。日毎、重くなってゆき、とうとう、鉾仕事 hands おえなくなった。

草刈り鎌までが重くなってきたのは、梅の花が散るところであった。

かつては、絵に描いた坂田の金時さながらだった快童の面影は、もはや、今はまったく無い。

山桜の満開のころには、ついに、めし茶碗の重みにも堪えられなくなった。いまではひとりで食事ができず、もよの手で赤ん坊のように口へ運んでもらうのだった。

卵の花が咲く夏のはじめの、或る夕べ。兄の瘦せ腰にたかるヤブ蚊を、もよが追い払ってやろうとして渋うちわであおぐと、あたかも突風を足もとにうけたかのように、音も立てず彦四郎は倒れ伏した。

怪力のこのような最期は、皮肉もまさに痛烈にすぎる。大ハンザキの祟りの怖ろしさに戦いた土地の人々が、やがて洩のほとりに祠を建立したという。

さて。――

ここで、百科事典を、ちょっとひもといてみることにした

い。

（大山椒魚ハ、現存スル両棲類中ノ最大ノ種類デアル。胸ハ長ク、四肢ハ短カイ。

前肢ノ指ハ四本デ、後肢ノ指ハ五本デアル。顔は扁平デ、目ハ極メテ小サク、鰓孔^{こう}エラアナ^いハナイ。

背部ニハ一面ニイボガアツテ、刺戟ヲウケルト、白イ汁ヲ分泌スル。ソノ香リハ山椒ニ似ル。

中国地方及ビ北九州地方ノ山地ノ清流ニ住ミ、「生キテイル化石」トシテ貴重視サレ、天然記念物ニ指定サレテ保護サレテイル。）

——ところで。

竜頭ヶ渚から十キロあまり下るうちに、谿流はぜんじ川になり、やがて、小さな城下町にさしかかって、ひとときわ瀬音を高める。

ここは、その昔の三浦氏二万三千石の居城の趾、勝山の町。勝山は、城下町といつても、いまはお城は跡形もない。

櫓あとの崩れた石垣に、わずかに昔の名残りをとどめているほか、在りし日の姿を偲ぶよすがはない。

しかし、小城ながらも、天守閣は三層楼で、一階は総庇^{そうひ}。二階は入母屋破風造^{いりもややぶふうぞう}。総塗籠^{そうぬりかご}であったという。

高田城というが、「かささぎ城」のほうが通りがよかった。おおかた鵲の飛びたつ姿さながらに、高く聳えていたのであ

ろう。

慶長年間の造営と伝えられる。

爾来、三百有余年。合戦の兵火にも罹らず、明治十三年まで山国の澄明な空に蒼古の風情床しく聳えていたのだった。

明治十三年といえば、西南戦争が終わって三年目。

「かささぎ城」が鵲に似た姿を、この地上から消したのは、この年の秋のことである。文明開化の時代相からすれば、城などは封建の遺物、無用の長物にすぎなかった。

かささぎ城は競売にかけられて、一金四百七十七円八十五銭也で落札されたのである。

かくて、数年の歳月を費して成った由緒ある城は、あなやというまに建築用材と十把ひとからげの薪に姿を変えたわけだ。

最後に月見櫓が解体された。そして、礎石が掘りおこされたのが、旧暦八月の十五日、あたかも仲秋の明月の日にあった。

当時、この城の最後の城主、十三代目の三浦頭次子爵は東京に居住していたが、国家老の石黒典膳は、邸内お嬢端の昔ながらの屋敷に、佇びしく逼塞^{ひつさく}していた。

一藩の重きをなした家老職も、無腰の世になつては尾羽打ち枯らすばかりはない。

今から三年前、当時流行の鉾山熱にかされて、旧藩重役

数名と奉還金を出し合い、元も子もない失敗を喫して以来、いわゆる筍生活で、家屋敷もすでに抵当に入っていた。

今は、だだっ広い邸内に、娘の萩と二人きりの佇び住居。使用人もいない。

「さて、今宵は、まこと名月よな」

夜に入つて、団々たる満月のさし昇るのを眺めながら、慨然たる面持で石黒典膳は呟いた。

今さら思うても詮ないことだが、世が世なら、今宵は下役共をあまた招いて、長夜の観月の宴を催すところである。

が、いまは月見の馳走もない。娘の萩がこさえた心ばかりの米団子が、月かげ射し入る濡れ縁の小机にお供えしてあるだけ。

思えば美々しく着飾った萩が、名月に献じる琴の音を、美酒をふくみつつ聞いたものだが、今は晴れ着も無ければ、琴も無く、また美酒もない。

「いや、待てよ」と、石黒典膳は腰を上げた。

美酒はないが、ドブロクならまだ残っていたはずだと台所にゆき、徳利を振ってみた。音がする。

その一升徳利を提げて、石黒典膳は娘に声をかけた。

「今宵の月は、お城あとにて眺めることにしよう。お城も、いよいよ、今日が最後ゆえな。さあ、来やれ」

典膳は、家紋の抱き茗荷の紋付を羽織つたが、色褪せたヨ

ウカン色。頭には、いまだに旧弊な胡麻塩の丁髷ちんまげを頂いている。

萩は、着古したお召に、これもくたぶれた丸帯を結んだ。

髪かざりもない。今年二十五歳といえ、当時としては婚期をだいぶ過ぎてゐる。が、色白、瓜実顔の、やや淋しい顔立ちながら、美しかった。

朽ち傾いた大手御門から、本丸跡へと登って行くと、おりから峯を放れた十五夜の月が、荒城あとを隈なく照らし、冴え冴えとして、悽愴である。

典膳は、月見櫓あとの庭石の一つに腰をおろして、ドブロクを口にふくんで眼を閉じた。

臉のうらに、まざまざしてくるのは、在りし日のかささぎ城と、両刀を帯びていた頃のわが姿である。まこと榮枯盛衰の世の中ではある。

このとき。回想の感慨から、典膳がわれに返ったのは、娘の萩が、

「あっ?！」

と叫んで、典膳の腰にとりすがってきたからだだった。

「萩。いかが致した?」

声もなく萩が指さしている方角には、きょう掘り返えされた櫓の礎石が散在している。

眼をこらすと、その礎石と礎石の間に、ひよろりと立つ人

影らしいものが見えた。

典膳が萩をうしろにかばいながら立ち上がると、人影らしいものは、よろめきながら、礎石の間から出てきて、月光を浴びた。

「やっ！」

思わず典膳も声を発した。まことに、一種、異相の人物だったのである。

ぼろぼろになった白衣を、小柄な身体にまとい、よろめく足を踏みしめながら近づいてくる。萩の慄えが典膳の背中に伝わるが、無理もない。典膳も、このような異相な人間を見るのは、ホゾの緒切って初めてだ。

扁平な頭には、頭髮が一本もなく、ぺらっとしている。眼は、在るか無きかの小さい金壺眼で、顎がいやに横に張っている。見たこともない巨大な口だ。

皮膚の色は、茶褐色に近い。まことに醜怪そのもので、近づいてくるにつれて、ぷーんと異臭が匂うのである。

「も、もし。お武家さま！」

ペコリと、扁平、無毛の頭をさげた。

明治御一新このかた、「お武家さま」と呼ばれたのは今が初めてであった。

「お、お願いでござります。お武家さま」

もう一度「お武家さま」と呼ばれて、典膳は奇妙な気持ちに

なった。

典膳は、明治になってこの方の町人、百姓どもの掌を返したが如き無礼、無作法に、かねて心中齒噛みをしているのである。

しかるに、こやつは……。そこで、典膳は、

「お願いとはなにか、申してみい」

応じると、

「みず……みず……水を、なにとぞ、お恵み下さりませ」
ヘタヘタと土下座して、手を合せた。なんだか、ヌラヌラした感じの手であった。

「水か。生憎、水は所持しておらぬ」

答えると、そやつは身悶えして、

「そ、その徳利の水を……ほんの少しでもよろしうござりますゆえ。なにとぞ、お武家さま、お情けをもちまして……」

いかにも切なげな呼吸づかいである。

「この徳利はな。水ではない。濁酒じゃ」

「ダクシュ？」

どうやら、濁酒を知らないらしく首をかしげたが、よくせき、渴いているとみえて、

「か、かまいませんぬ。そのダクシュとやら、頂かせて下されませ」

いざり寄ると、ヌラヌラした手を差しのべた。典膳は徳利を渡してやったが、巨大な口がカッと開いたときは、思わずギョツとなつて後退つた。

その大きな口へ、徳利を傾けて、どくっどくっとな流しこんだ。少々恵んでくれと言つていたのに、みるみるあらかた飲みほして、

「はーっ／＼」

と、大きな溜息を吐き、

「あーあ／＼ やれ、助かりました。有難や」

はじめて人心地がついたように、あたりをキョト、キョト眺めまわしたが、

「あのもし、お武家さま、お城のこの有様は、なんとしたことでござりますか。もしや、三浦義次公さまが、合戦で御不運でも？」

「こ、これ。なんと申した？ 義次公さまだと」

思わず声が大きくなつていた。

典膳がおどろくのも無理ではなかった。義次公というのは、先々代の殿様のお名前だからである。

「義次公さまと申さるは、すでに九十余年前に御他界になられた殿のお名じゃ。いつたい、その方は、何者ぞ？」

「えっ／＼ 九十余年……」

こんどは、相手がおどろく番だった。驚声を発したとき、

ぶーんとまたも異臭が匂つてきた。生臭いような、それでいて一種香ばしい、山椒に似ていた。

「はてさて。私めには、ほんの一寸眠りの気が致しまするが、さようでしたか。あれから、もう、百年近くも経つておりましたか」

感慨深かげにいうのである。

なんとも奇怪至極だ。典膳は、そつとおのれの膝を抓つてみた。痛い、これは夢ではなさそうだ。

そこで典膳は、或いはこやつ、狐か狸ではあるまいかと考え、声を荒げた。

「これ！ 尻つぽを出せ」

「尻つぽ……でござりますか。私めには生憎、ござりませぬ」

と、満更、嘘を吐いているようでもない。

「しからば、そちは、何者じゃ」

「これは、申しおくれました。――私めは、もと旭川峡の竜頭ヶ淵に棲んでおりましたハンザキにござります」

「ハ、ハンザキ……とな！」

典膳は愕然とした。が、言われて、よくよく見ると、扁平無毛の頭といい、小さい金蜜眼といい、大きな口といい、ヌラヌラした皮膚といい、どこやらハンザキを連想させる。

「御不審はごもつともながら、なにを隠しましょう。私め

は義次公さまのお手に捕えられて、この月見槽の土台石の下に封じこまれておりましたところの……」

次第に呂律が怪しくなったが、そこまでいうと、ひつく、ひつく……と、しゃつくりをはじめ、べらべら頭をゆらゆらと揺さぶりだした。

「はて、これはどうも、なんだか頭がボーッとしてきよりましたが、只今、頂きましたダクシュとやらのせいでござりましょうか……」

ドブロクの酔いがまわってきたとみえる。

ハンザキの巨大な口から、ヨダレが流れはじめた。

「や、これヲ、妙ちきりんの心地になってきた。どれ、早う洩へ戻ろうかいの」

よろよろと立ったが、足もとがふらついている。

「それにしても、有難うござりました。して、お武家さまのお名前をお聞かせ下され、私めは、竜頭ヶ洩のゴロスケと申しまする」

見れば見るほど異相のうえに、奇妙な臭気は発するし、気味が悪いが、しかし、物腰のいんぎんなことで、礼儀の町重さは、当世の町人百姓どもの比でない。

「わしか、廓内濠端に住む家老の石黒典膳じゃ」

家老と名乗るのも、久しぶりであった。

「御家老の石黒様でござりますか。有難いこつて、ヘイ。

では、ごめんなされませ」

と行きかけたが、ふり返えると、

「して、そちらは、お嬢さまでござりまするか？」

小さい金壺眼で、じいっと見られて、萩は寒けが背筋を走ったのであらう。ぶるっと慄えている。

「うむ、娘の萩じゃ」

「有難うござりまする。——いやはや、これヲ、ヘンテコリンな気持じゃ。なんともはや、……ウィーッ！」

いよいよ、扁平無毛のべらべら頭をぐらぐらさせながら、ゴロスケが大手門へ向つて、石段を千鳥足で降りかけたとき、月が雲間に入つて、すうーっと四辺がかけた。